

人文会ニュース

jinbunkai news

December 2017

NO. 128

1
15分で読む

マルクスの偉大さ

佐々木隆治

17
特別寄稿 1

八戸ブックセンターの歩みとこれから

音喜多信嗣

23
特別寄稿 2

書評欄のつくり方

野中彰久

29
編集者が語るこの叢書・このシリーズ 13

考えるとはどういうことか

—— 加藤尚武著作集刊行の意義

西谷能英

2017年研修旅行報告



www.jinbunkai.com

記憶の海辺 一つの同時代史 池内紀

一〇歳のときの朝鮮戦争から、カラカ沢を終えた六〇歳までをたどった池内紀、最初に最後の自伝的回想録。

2400円

日本人とリズム感 樋口桂子

「拍」をめぐる日本文化論

どうして日本人はリズム感が悪いのか。リズムをめぐる謎から描き出される、おどろきと発見の日本文化論。

2200円

世界の終焉 今ここにいるものの論理 J・レスリー

論理と現状認識を駆使し、わたしたちが直面する未曾有の危機から、人類が生き延びるさまざまな可能性を徹底検証する。

2700円

青土社 東京神田神保町 03-3294-7829
http://www.seidosha.co.jp/ (価格税別)

終わりのなき対話

① 複数性の言葉 4500円
(エクリチュールの言葉)

湯浅博雄／上田和彦／郷原佳以 訳

② 限界―経験 5900円

湯浅博雄／岩野卓司／上田和彦
大森晋輔／西山達也／西山雄二 訳

③ 書物の不在 5200円
(中性的なもの、断片的なもの)

湯浅博雄／岩野卓司／郷原佳以
西山達也／安原伸朗 訳

全3巻 完結

伝説の書、
半世紀の時を超え、
ついに全訳。
モーリス・ブランショ

筑摩書房 サービスセンター 048-651-0053
*定価は表示価格+税
http://www.chikumashobo.co.jp/

丸山眞男 講義録 別冊 【全2冊】

〔別冊一〕日本政治思想史 1956/59

〔別冊二〕日本政治思想史 1957/58

1950年代の東大法学部の講義を復元した、
壮大な知的ドキュメント。 各3800円

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
http://www.utp.or.jp/ (価格税別)

創元社

私たち、戦争人間について 愛と平和主義の限界に関する考察

石川明人 著／四六判・並製・296頁
定価 (本体1,500円+税)

「心は遺伝する」と どうして言えるのか

ふたご研究のロジックとその先へ
安藤寿康 著／四六判・並製・264頁
定価 (本体1,800円+税)

十二支読本

暦と運勢のしくみを読み解く
稲田義行 著／四六判・並製・256頁
定価 (本体1,800円+税)

〈本社〉大阪市中央区淡路町4-3-6
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
〈支店〉東京都新宿区神楽坂4-3 Tel.03-3269-1051
http://www.sogensha.co.jp/

— 15 分で読む —

マルクスの偉大さ

「プロレタリア革命は、たえず自分自身を批判し、進みながらもたえず立ち止まり、すでに成し遂げられたと思えたものに立ち戻っては、もう一度新しくやり直し、自分をはじめにやった試みの中途半端な点、弱い点、けちくさい点を情け容赦もなく、徹底的に嘲笑する」(『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』*)

* 参考文献・関連図書の詳細は 15〜16 ページのブックガイドに掲載。

「マルクスなくして未来はない」

冷戦が崩壊し、フランシス・フクヤマが「歴史の終わりを唱えたとき、多くの「マルクス主義者」は雪崩を打ったように転向した。日本でも、多くの「マルクス経

済学者」が『資本論』を捨て、マルクスの「欠陥」や「限界」を論じた。ソ連・東欧「社会主義」の崩壊と資本主義の繁栄は、マルクスの理論的誤謬を完膚なきまでに証明したようにみえた。

だが、20 世紀の知的巨人たちは、それとは正反対の態度をとった。たとえば、ジル・ドゥルーズは、最後の著書を『マルクスの偉大さ』というタイトルにするつもりであったという。彼は最晩年のインタビューで次のように語っている。「マルクスは間違っていたなどという主張を耳にする時、私には人が何を言いたいのか理解できません。マルクスは終ったなどと聞く時はなおさらです。現在急を要する仕事は、世界市場とは何なのか、その変化は何なのかを分析することです。そのためにはマルク

佐々木 隆治 (立教大学経済学部准教授)

スにもう一度立ち返らなければなりません」(「思い出す」と『批評空間』II-9 所収)。

むろん、ここである「マルクスの偉大さ」とは、かつて「マルクス主義者」たちによって神格化され、聖典化されたマルクスの「偉大さ」ではないだろう。むしろ、市場経済が世界を席卷し、資本主義が勝利を収めたようにみえるそのときに、既存の共産主義運動が破綻し、人々が「マルクスは終わった」というまさにそのときに、立ち現れてくるような「偉大さ」である。

「脱構築」の哲学者として名高い、ジャック・デリダもまた、次のように述べている。「マルクスを読まないこと、読み直さないこと、議論しないことは、つねに過失であることになるだろう。……それは今後ますます過失だということになり、ますます理論的、哲学的、政治的責任にたいする違反だということになるだろう。『マルクス主義的』な(国家、党、支部、組合、そしてその他の教条生産的な場といった)教条機械やイデオロギー装置が消滅過程にある現在、この責任から目をそむけるときのわれわれに残されているのは、もはや弁明ではなく、逃げ口上のみとなる。この責任なくして、未来はない。マルク

スなくしてはない。マルクスなくして未来はないのである」(『マルクスの亡霊たち』)。デリダによれば、われわれは、「現存社会主義」が崩壊し、既存の共産主義運動が破綻したからこそ、マルクスを読む「責任」を引き受けなければならない。この責任を果たすことなしには、「未来はない」。

ドゥルーズやデリダのメッセージは、20年以上の年月が経過した現在でも、依然として傾聴に値する。というのも、近年の資本主義的生産様式の矛盾の深まり(貧困や格差の拡大、金融恐慌、環境破壊など)によってマルクスの復権がなされたようにみえる場合でさえも、多くの場合、依然としてマルクスは「マルクス主義」と混同され続けているからだ。だが、マルクスがかつての「マルクス主義」と混同されているかぎり、その「偉大さ」も、「未来」への可能性も掴み取ることではできない。すなわち、マルクスの資本主義批判の深さ、そのスケールの大きさを理解することはできない。資本主義の「終焉」の徴候が現れ、ポピュリズムが蔓延する現在ほど、マルクスを「マルクス主義」としてではなく、マルクスその人のテキストとして読むことが求められている時代はない。

「人間にとっての根本は人間そのものである」

人々のなかにはマルクスについての拭いがたい固定観念がある。それは、マルクスの変革ヴィジョンとは、マルクス主義によって理論武装された共産党が搾取や貧困に苦しむ労働者階級を政治的に組織して政治権力を掌握し、産業の国有化と中央集権的な計画経済を実現することにより、所得の平等化を実現するものである、という観念である。もちろん、これはたんなる偏見にもとづくものではない。なぜなら、かつてマルクス主義者自身がマルクスの理論として喧伝してきたものだからである。

だが、実際のマルクスのヴィジョンはこのような固定観念とはほど遠く、むしろそれに反しているとさえ言うことができる。マルクスのヴィジョンは、このような貧しいイメージによって語ることができるような、生半可なものではない。それは徹底的にラディカルである。マルクスの偉大さの根幹にあるのは、間違いなく、このラディカルさなのだ。とはいえ、マルクスは社会運動においてたんに急進的な方針を打ち出すだけの過激派ではな

かったし、大言壮語を吐くだけの軽薄なアジテーターでもなかった。マルクスのラディカルさは、何よりも、物事をその根幹から非妥協的に考え抜いたうえで、実践的な方針を導き出す、その徹底的な批判的姿勢にある。

マルクスは、現実の社会関係の強固さにたじろぎ、それを不動の前提として受容することはなかった。それがどれほど強力にみえようと、現存の社会秩序を変革するという固い意志をもち、そのための闘争に生涯を懸ける覚悟をもっていた。じっさい、マルクスは、共産主義者としての闘いのなかで数々の苦境に陥ったが（大学からの排除、言論弾圧、国外退去命令、亡命生活のなかでの経済的貧困等々）、自らの理論的信念を曲げることは決してなかった。

しかし、だからといって、現実から懸け離れた理念を掲げるだけの教条的な理想主義者でもなかった。むしろ、マルクス独自の理論的構えである「新しい唯物論」は、そのような無力な理想主義者を批判し、乗り越えるための理論的苦闘のなから立ち現れてきたのである。マルクスは『ドイツ・イデオロギー』において次のように述べている。

「共産主義というのは、我々にとって、作り出されるべき一つの状態、それに従って現実がただされるべき一つの理想ではない。我々が共産主義と呼ぶのは、現在の状態を止揚する現実的運動である。この運動の諸条件は、いま現存する前提から生じる」

まさにこのような「実践的・批判的」な構えこそを、マルクスは「フォイエルバッハ・テーゼ」において「新しい唯物論」と呼んだのである。すなわち、マルクスの唯物論とは、現実の社会関係のラディカルな変革を志向するからこそ、たんなる理想主義者であることを超え、現実を直視し、なぜ、いかにしてそのような現実が成立しているのかをラディカルに捉え返すという理論的構えのことに他ならなかった。

では、現実の社会関係をラディカルに捉えるということとは具体的にはどういうことなのだろうか。若きマルクスは次のように述べている。「ラディカルであるということは物事を根本から把握することである。だが、人間にとっての根本とは人間そのものである」(『ヘーゲル法哲学批判序説』)。マルクスにとって、ラディカルに、根本

的に現実の社会関係を捉え返すということは、すなわち、人間そのものから社会を捉え返していくということに他ならない。

もちろん、このことはたんなるヒューマニズムを意味するのではない。マルクスはフォイエルバッハのように人間の素晴らしさを理念的に賛美することはなかった。むしろ、マルクスが注目するのは現実の社会で生活している人間たちである。マルクスは大文字の社会、あるいは構造から出発し、そのなかに存在する人間たちを把握するのではない。逆に、現実生活している人間たちから出発して、現実の社会関係を捉え返すのである。マルクスはこのことによって、現実の社会の支配的権力の源泉が、他ならぬ私たちの日常的な営為にあることを明らかにした。このような見方は、権力を、国家や支配階級が所有できる「物」ではなく、むしろミクロな社会関係のなかで作動する戦略として捉えたミシェル・フーコーの権力論にも通底するものだと言えよう。

もう少し具体的にみてみよう。たとえば、私たちが経済について語るとき、問題になるのは往々にして所得や物価、株価、GDP等々である。私たちは、これらの

経済的カテゴリーを自明のものとして経済について語り、政策の是非について何らかの判断を下す。もし所得格差が開き、貧困層が増大しているのであれば、所得格差を是正するための何らかの経済的再分配が必要だという結論になるだろう。だが、マルクスはこのようには考えない。むしろ、マルクスは私たちが自明の前提としている、所得や物価などの経済的カテゴリーそのものを根本から問い直さなければならない、と主張するのである。

マルクスは26歳のとき、初めて経済学を研究したノートである『経済学・哲学草稿』で次のようなことを述べている。経済学者たちは私的所有（ここでは商品、貨幣、資本などの経済的カテゴリー全般を指す）を前提として、経済法則を叙述するだけで、私的所有がなぜ、いかにして存在しているのかを説明しない。社会主義者たちもまた、私的所有を前提としただけで、この私的所有を平等に分配しようとするだけだ。だが、われわれがしなければならぬのは、むしろ、私的所有を人間の活動の特殊なあり方から捉え返し、私的所有そのものを乗り越えることである。私的所有を生み出し、再生産しているのは、「疎外された労働」に他ならず、この「疎外された労働」を

克服することこそが根本問題なのだ、と。なお、ここでいう「疎外された労働」とは、「労働者が自分の労働の生産物にたいして、それをひとつの疎遠な対象とするようにして、ふるまう」労働のことである。

若干、難解に聞こえるかもしれないが、内容は明快である。資本主義社会では賃労働が典型であるが、われわれが賃労働を行うとき、この労働の産物を自分のものとして扱うのではない。そうではなく、会社のもの、すなわち資本のものとして扱う。すなわち、われわれが自分たちの生産物を、自分たちのものとして扱うのではなく、資本のものとして扱うことによって、はじめて資本主義というシステムは成立しうるのだ。

その後、マルクスは『資本論』及び関連草稿のなかで、より精緻な資本主義批判の理論を作り上げていく。そこでは、共同体的束縛から解放された私的個人による私的労働こそが商品と貨幣にもとづく市場経済を生み出すことが明らかにされる。なぜなら、人格的依存関係から切り離されている私的個人は互いに疎遠であり、相手もっている物にしか関心をもたないので、むしろ物のほうが「価値」という社会的力を獲得し、このような「価

値」をもつ物、すなわち商品や貨幣（貨幣は商品の「価値」を表示する役割を独占的に担う商品のこと）に依存して人々は経済関係を取り結ぶようになるからだ。

他方、このような市場経済のもとでは、生産手段をもたない大半の人々は他人に雇われて働くという賃労働に従事するようになる。資本家は、賃労働者を雇い、賃労働をさせることにより、投資した価値以上の価値、すなわち剰余価値を生み出すことが可能になり、自らが所有する価値を資本に転化することができる。ここでは、「労働者自身が、たえず客体的な富を資本として、すなわち彼にとっては、外的であって、彼を支配し、搾取する力として生産する」（『資本論』第一巻）。このように、マルクスによれば、私的労働や賃労働という人々の日常的な活動こそが資本主義という経済システムを再生産し、貨幣や資本の力を生み出し続けているのである（以上の点の詳細については拙著『カール・マルクス』を参照）。

もちろん、私たちの日常的な感覚においては、「大企業」や「国家」が権力を「もっている」ようにみえる。じっさい、かつての教条的な「マルクス主義者」も同様の発想で国家権力を掌握しさえすれば、社会変革が可能

だと考えた。だが、マルクスによれば、それは可能ではない。私たちを支配する「権力」は誰かが所有できるような「物」ではなく、まさにこの社会を構成している私たち一人一人の日常的な振る舞いによって産出され続けている。つまり、資本主義社会においては、私たちは自分自身の振る舞いが生み出した社会的な力に支配されているのである。

「各個人の十全で自由な発展を根本原理とする より高度な社会形態」

もしそうであるならば、資本主義社会が生み出す諸矛盾は、たんに国家権力を掌握したり、新たな法律を制定したりするだけでは解決できない。というのも、私たちの日常的な生活のあり方、労働のあり方そのものを変革しないかぎり、たえず私たちを支配する力が発生し、再生産され続けるからである。問題は、人々が日常的な生活においてどのような関係を形成するかなのだ。マルクスが展望した共産主義が、たんなる生産手段の国有化や所得の平等化ではなく、「各人の自由な発展が万人の自

由の発展にとつての条件であるようなアソシエーション「自発的結社」(『共産党宣言』)、「各個人の十全で自由な発展を根本原理とするより高度な社会形態」(『資本論』第一巻)であつた理由はここにある。

経済恐慌や貧困、環境破壊をもたらす資本主義を乗り越えるには、市場とは異なる原理で生産と分配を制御しなければならない。だが、それを行うのは中央集権的な近代国家ではない。現代社会では、市場(新古典派経済学、新自由主義)と国家(ケインズ経済学、「社会主義」)の二項対立で思考することを当然の前提としてしまつてゐるが、マルクスはこの二項対立そのものを乗り越えようとした。マルクスは『フランスの内乱』において次のように書いている。

「もし協同組合的生産が……資本主義システムにとつてかわるべきものとすれば、もし協同組合の連合体が一つの共同計画にもとづいて全国の生産を調整し、こうしてそれを自分の統制のもとにおき、資本主義的生産の宿命である不断の無政府状態と周期的痙攣を終わらせるべきものとすれば——諸君、それこそ共産

主義、「可能な」共産主義でなくてなんであろうか?」

ここに端的に示されているように、マルクスにとつて「可能な」共産主義とは、国家による計画経済などではなく、労働者たちのアソシエーションである協同組合が互いに連合し、社会的生産を調整する、そのようなシステムであつた。このようなマルクスの見地からすれば、かつて存在したソ連や東欧諸国の「社会主義」は、生産手段の国有化と中央集権的な計画経済によって、資本主義の変形したヴァージョンを作り出したにすぎない(ソ連型「社会主義」についてはチャトパディヤイ『ソ連国家資本主義論』を参照)。

アソシエーションを形成し、市場や国家という近代の枠組みそのもの乗り越えるというマルクスのヴィジョンは、資本主義社会にどっぷり浸っている私たちからすれば、途方もないことにみえるかもしれない。たしかに、それは、選挙での一時的な多数派の形成や、労働条件や生活環境を改善するための法律の制定、国家主義的な市場経済の統制などもよりも遙かに困難であろう。若い頃、社会主義革命の可能性を楽観的に考へていたマルクスも

また、経済学研究や現実社会の分析をつうじて資本の力をますます深刻に認識し、この困難さを痛感するようになった。

だが、マルクスはこの困難から逃げることはなかった。マルクスはいっけん実現可能性が高そうな、安易な「解決策」を提唱することはなかった。たとえば、現実の生産関係に手をつけることなく、「人民銀行」という制度によって万事が解決できるとする、「社会主義的な意味での信用・銀行制度の奇跡的な力についてののもろもろの幻想」を徹底的に批判した。最近でいえば、厳しい利害対立をとまなう社会運動を行うことなく、「リフレ政策」や「ベーシック・インカム」などによって万事が解決可能であるかのように考える幻想がそれにあたるだろう。どんな制度や法律があるうと、結局、私たちの日常的な行為が変化しなければ、社会は変わらない。支配的権力の力の源泉は、われわれの日常的行為の総計なのである。これを変革するには、長期的で粘り強い闘いを積み重ねるほかない。

「労働者階級は、自分自身の解放をなしとげ、それと

ともに、現在の社会がそれ自身の経済的作用によっていやおうなしに向かつていく、あのより高度な形態をつくりだすためには、長期の闘争、すなわち環境と人間とをつくりかえる一連の歴史的過程をくぐりぬげなければならぬ」（『フランスの内乱』）

既存の労組や社会運動が衰退している日本では、このような闘争は途轍もなく困難にみえる。だが、私たちの日常を改善し、変革しようとする闘いはいたる所で行われている。ブラック企業で苦しむ若者がユニオンに加わり、団体交渉を行い、労働条件の改善を求めるとき、利益中心主義的な保育所で働いている保育士が人間らしい保育を求めて立ち上がるとき、奨学金の返済で苦しむ若者が路上で抗議するとき、どんなに小さくとも、新たな社会の萌芽が確実に芽吹いているのだ。

もちろん、以上のことは、一切の制度的改良が無意味だということを意味しない。むしろ、資本主義との闘いが、たんなる政治的権力の獲得にとどまらない、労働や生活の次元での長期的闘争でなければならないとすれば、この闘争をサポートし、拡大するための制度的改良

はきわめて重要な意味をもつ。典型的なのは、労働時間の法律的規制である。マルクスは、労働時間規制がたんに賃労働者たちの労働条件を改善するというだけでなく、賃労働者たちが資本の支配から自由な時間を確保できるようなことを重視した。『資本論』の最初期の草稿である『経済学批判要綱』で述べられているように、「余暇時間でもあれば、高度の活動のための自由時間は、もちろん、その持ち手がある別の主体へと転化する」からである。逆に、賃労働者がこのような自由時間を確保できず、資本のもとで長時間労働に従事させられているあいだは、資本の力に対抗しうるような主体を形成することは困難である。だからこそ、マルクスは「それなしには、いっそう進んだ改善や解放の試みがすべて失敗に終わらざるをえない先決条件は、労働日の制限である」（『資本論』第一巻）とまで述べ、労働時間規制の重要性を強調したのである。

「最もアルカイックな型のより高次な形態」への復帰

とはいえ、以上に述べたような、マルクスのラディカ

ルな変革ヴィジョンは、資本主義社会に生活する多くの人々を当惑させるに違いない。貧困や格差、金融恐慌など、資本主義の矛盾が噴出する一方、資本主義は絶対に揺るがすことができない前提であるという観念が強まっている、現在の日本ではなおさらである。じっさい、マルクスが『資本論』で強調しているように、資本主義は自らを正当化し、「自然」な生産システムであるように錯覚させる物神崇拜をたえず産出する。たとえ現在の新自由主義的な政策に批判的な人であっても、この前提から抜け出すのは容易ではない。マルクスをマルクスとして読むことの難しさは、ここにもある。

だが、人類史という巨視的な観点から捉え返してみると、マルクスの主張はそれほど特異ではない。私たちの直接の祖先にあたるホモ・サピエンスがいわゆる「文化」と呼べるようなものを形成し始めたのが7万年前であり、農耕を開始したのは1万2000年前である。それにたいし、私たちが生活する資本主義的生産様式が誕生したのは、どんなに遡ってもせいぜい大航海時代が始まる500年前にすぎない。それが現在のような典型的形態をとって西欧に定着し始めたのは200年前

であり、グローバルに拡大して定着したのはつい最近である。人類は非常に長い間、資本主義とは全く異なる社会システムのなかで生き長らえてきたのである。それらは、いずれも共同体に基礎を置く社会であり、労働や分配のあり方は、大部分、共同体の習慣、伝統などに依存していた。人類史的にみれば、労働の編成や生産物の分配を全面的に市場に依存する資本主義社会こそが特異なのである。そうであれば、この資本主義的生産様式を自明視し、それが未来永劫続くと考えるほうがよほど不合理であろう。じっさい、経済の長期停滞が続くなか、資本主義の「終わり」をテーマにする著作も増えてきている(代表的なところではヴォルフガング・シュトレック『資本主義はどう終わるのか』、デヴィッド・ハーヴェイ『資本主義の終焉』、水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』)。

マルクス自身もまた、資本主義の変革を人類史的な視点から捉えた。マルクスにとって、資本主義の変革は、なんらかのグループや政党が政権をとり、「生産手段の国有化」を宣言することによって実現できるようなものではない。およそどのような生産様式の変革であれ、人類史的な事業であり、特定の個人やグループによる恣意

によって実現できるようなものではないからだ。共産主義社会の実現にあたっては、やはり、歴史的なプロセスを前提とした諸条件の成熟が必要である。

たとえば、資本主義のもとの社会的生産力の高度な発展がなければ、「各個人の十全で自由な発展を根本原理とするより高度な社会形態」は誕生しえない。そのような「社会的労働の生産力の発展は、資本の歴史的な任務であり、歴史的な存在理由である。まさにそれによって資本は無意識のうちにより高度な生産様式の物質的諸条件をつくりだすのである」(『資本論』第三部主要草稿)。さらには、人類が資本主義の変革を不可避と考えるような、生産力と資本主義的諸関係の衝突の激化(労働問題、貧困、環境破壊、経済恐慌)も前提となるだろうし、市場に依存することなく経済を運営するほどに労働者階級の力量が高まっていることも必要だろう。生産様式の変革はあくまで人類史的事業であり、この社会の構成員の大多数によって成し遂げられなければならない。「労働者階級の解放は労働者階級自身の手で闘い取られなければならない」のである(「国際労働者協会暫定規約」)。共産主義者に可能なのは、資本主義システムの運動法則を明らかに

にすることによって、その変革の方向性を示し、「産みの苦しみを短くし、やわらげる」ことだけである。

だが、このような歴史観には、一つの欠陥があった。それは前近代社会にたいする近代社会の優位性を単純に前提するような、教条的な進歩史観を生み出してしまったということだ。これは、前近代的な伝統を重視する人々の抵抗運動を軽視することにもつながった。じつさい、若い頃のマルクスは、資本主義による前近代社会の破壊をどちらかといえば、ポジティブに捉えていた。というのも、どれほど抑圧的であれ、資本主義は前近代社会の身分差別や因習から社会を解放してくれると考えたからである。このようなマルクスの把握は、留保付きであるとはいえ、自由貿易やイギリスのインド支配をも肯定的に理解することにつながった。

しかし、マルクスは徹底的な歴史研究によってこの欠陥を徐々に克服していく。マルクスのラディカルさは、彼の研究スタイルにも貫かれていた。『経済学批判要綱』では、人々が人格的紐帯のなかで土地と結びついて生活している前近代的共同体を肯定的なニュアンスで描き出し、人々が土地から引き剥がされ、無所有者に貶められ

てしまっている資本主義の特異性を浮き彫りにした。さらに、晩年のマルクスはただ共同体を肯定的に評価するだけでなく、それを積極的に変革構想のなかに位置づけるようになる。たとえば、「ザースリチへの手紙」とその草稿のなかで、農耕共同体の生命力(社会の持続可能性)や自由な性格を高く評価し、「ロシアにおける社会的再生の拠点」になりうるとさえ述べている。晩期のマルクスは、ロシア、インド、アルジェリア、ラテンアメリカ、インドネシアなどについての膨大な共同研究をつうじて、前近代的共同体の肯定的要素を深く認識するようになり、そのような要素と労働者階級の運動が連帯する必要があることを理解するようになったのである(この点についてはアンダーソン『周縁のマルクス』を参照)。こうして、マルクスは、資本主義がもたらしている「危機は……近代社会が最もアルカイックな型のより高次な形態たる集団的な生産と取得へ復帰することによって終結する」という認識に到達した。いまや、共産主義は「アルカイックな型の高次な形態」に復帰することによって実現されるものとして把握されるのである。

このようなマルクスの前近代社会にたいする眼差しは、

現代においても非常に示唆的である。というのも、資本主義以前の人類の営為を参照することは、現在私たちが自明視している社会システムを根底から問い直すことにつながるからであり、しかも、近代的システムによって覆い隠されている様々な共同性の可能性を浮き彫りにするからだ。晩期マルクスの共同体論は、反資本主義的想像力を掻き立ててくれるカール・ポランニーの諸著作やデヴィッド・グレーバーの『負債論』に通底する射程をもっていたのである。

「自分たちの人間性に最も適合した諸条件のもとでの物質代謝」

マルクスには、21世紀に入るまでほとんど注目されてこなかった一つの謎がある。それは晩年の膨大な自然科学研究である。農芸化学、生理学、地質学、鉱物学、植物学、有機化学など多岐にわたる著作の勉強ノートが残されている。どうみても、社会変革とは無縁のテーマにみえる。それゆえ、かつてロシア革命後にマルクスの著作の編集者として活躍したリャザーノフは次のように疑問を呈した。「どうしてマルクスはこのような体系的で、徹底した要約のために、これほど多くの時間を無駄にし、一八八一年という晩年に地質学についての基本書の章ごとの要約にエネルギーを費やしたのであるうか。彼はもう六三歳だったのであり、こうした行いは弁明の余地のない学者ぶった振る舞いにすぎないのではないか」と。

晩年のマルクスは学者ぶるようになり、ラディカルさを失ってしまったのだろうか？ そうではない。むしろ、マルクスはよりラディカルになったのである。マルクスは、晩年に共同体研究を深め、資本主義にたいする批判をいっそう強化したように、自然科学研究をつうじて、資本主義をより根本なところから把握し、批判しようとしたのだ。

このことを理解するための鍵となるのは、物質代謝という概念だ。この言葉は、もともとは生理学において有機体の循環的な生命活動を表す概念であったが、マルクスは、これを転用し、人間と自然との物質的な循環を表す概念として使用した。とりわけ、農業を主題とする地代論を研究するなかで、リービッヒなどの農芸化学者の著作の知見にふれ、資本主義的生産様式による人間と自

然との物質的循環の攪乱に注目するようになる。たとえば、短期的な利潤追求に走る資本主義のもとでは、持続的な物質代謝が維持されず、地方の土地が疲弊し、逆に都市が汚染されてしまう、という問題である。つまり、マルクスは、いまでいうエコロジー的な観点から、物質代謝概念を重視するようになったのである。

かつて若きマルクスは、ラディカルであるとは、人間から社会を把握することだと考えた。だが、もはやその立場は乗り越えられる。ラディカルであるとは、人間のみならず、人間と自然との物質代謝から、社会を捉え返すことに他ならない。もちろん、社会を構成するのは人間以外のなものでもないが、その人間の活動は物質代謝と不可分だからだ。じっさい、『資本論』第一巻では、社会関係の形成を考えるうえで最も重要な活動である労働を物質代謝によって定義している。「労働は、さしあたり、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、制御する一過程である」。資本主義社会では、この物質代謝を制御するはずの労働が、賃労働という特殊な形態をとり、資本の価値増殖を目的として行わ

れるために、逆に持続可能な物質代謝を攪乱してしまうのである。このような観点に立つとき、共産主義は、たんに生産と分配を自覺的に制御し、人間の自由を実現する社会であるというだけではない。「アソシエイトした人間たちが……この物質代謝を合理的に規制し……自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した諸条件のもとでこの物質代謝をおこなう」社会でもなければならぬ（『資本論』第三部主要草稿）。このようなポスト資本主義のヴィジョンは、ナオミ・クラインが『これがすべてを変える』において提起している問題とも見事に響き合っており、きわめてアクチュアルだと言えよう。マルクスは、まさに以上のような物質代謝の合理的制御の可能性を展望するために、経済学研究をこえ、自然科学をも徹底的に研究したのである（この点については岩佐・佐々木編著『マルクスとエコロジー』を参照）。

このことが示すのは、俗説と異なり、マルクスがエコロジーに深い関心をもっていたということだけではない。マルクスが、資本主義の強力さと変革の困難さをより深く認識するにつれ、絶望するのではなく、安易な「解決策」を提唱するのでもなく、教条的に同じ主張を繰り返

すのでもなく、以前の自らの見地をも乗り越えて、何度も根本的なものに立ち返っていったということである。たしかに、このような試みは『資本論』の完成を妨げたかもしれない。だが、マルクスは自己満足のために手持ちの草稿を仕上げて体系を完成させることよりも（じっさい彼の手元には後にエンゲルスが編集して刊行できるだけの草稿があった）、たとえ未完に終わろうとも、飽くなき探求によって、より深く、より根底的な変革ヴィジョンを示すことを選んだのだ。私には、この晩年の試みのなかに、マルクスの偉大さが体現されているように思えてならない。

佐々木 隆治（ささき りゅうじ）

1974年生まれ。立教大学経済学部准教授。専門はマルクスの経済理論、社会思想。日本MEGA編集委員会編集委員。著書に『カール・マルクス——「資本主義」と闘った社会思想家』（筑摩書房、2016年）、『マルクスの物象化論——資本主義批判としての素材の思想』（社会評論社、2012年）など。

15分で読むマルクスの偉大さ・ブックガイド

(書店で入手可能なものに限定した)

マルクスの著作

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体価格	刊行
岩波書店	4003412411	ユダヤ人問題によせて ヘーゲル法哲学批判序説	カール・マルクス(城塚登訳)	620	1974
岩波書店	4003412428	経済学・哲学草稿	カール・マルクス(城塚登・田中吉六訳)	900	1964
新日本出版社	4406024471	[新訳] ドイツ・イデオロギー	マルクス、エンゲルス(服部文男監訳)	1300	1996
平凡社	4582766493	ルイ・ボナパルトのブリュメール18日 [初版]	カール・マルクス(植村邦彦訳、柄谷行人付論)	1500	2008
大月書店	4272802500	資本論(全9冊)	カール・マルクス(岡崎次郎訳)	10900	1972
岩波書店	4003412459	共産党宣言	マルクス、エンゲルス(大内兵衛・向坂逸郎訳)	520	1951
筑摩書房	4480401168	マルクス・コレクション VI フランスの内乱・ゴータ綱領批判・時局論(上)	カール・マルクス(辰巳伸知他訳)	3000	2005

マルクス入門

筑摩書房	4480068897	カール・マルクス——「資本主義」と闘った社会思想家	佐々木隆治	860	2016
桜井書店	4921190088	図解 社会経済学——資本主義とはどのような社会システムか	大谷禎之介	3000	2001
堀之内出版	4906708529	『資本論』の新しい読み方——21世紀のマルクス入門	ミヒャエル・ハインリッヒ(明石英人他訳)	2000	2014
大月書店	4272430994	資本主義を超える マルクス理論入門	渡辺憲正他編	2400	2016
ポプラ社	4591155394	今こそ『資本論』——資本主義の終焉を生き抜くために	フランシス・ウィーン(中山元訳)	820	2017

伝記

白水社	(上)4560084458 (下)4560084465	マルクス——ある十九世紀人の生涯(上)(下)	ジョナサン・スパーバー(小原淳訳)	各巻2800	2015
朝日新聞社	4022577740	カール・マルクスの生涯	フランシス・ウィーン(田口俊樹訳)	3000	2002
清水書院	4389420208	マルクス [新装版]	小牧治	1000	2015

マルクス研究

社会評論社	4784518098	マルクスの物象化論——資本主義批判としての素材の思想	佐々木隆治	3700	2012
堀之内出版	4906708604	マルクスとエコロジー——資本主義批判としての物質代謝論	岩佐茂・佐々木隆治編著	3500	2016

(次ページに続く)

マルクス研究 続き

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
桜井書店	4905261032	マルクスのアソシエーション論——未来社会は資本主義のなかに見えている	大谷禎之介	5200	2011
新泉社	4787715005	増補新版 マルクスとアソシエーション——マルクス再読の試み	田畑稔	2700	2015
桜井書店	4921190668	マルクスはいかに考えたか——資本の現象学	有井行夫	2700	2010
桜井書店	4905261209	資本主義の成熟と転換——現代の信用と恐慌	小西一雄	3700	2014
青土社	4787706096	マルクスのアクチュアリティ——マルクスを再読する意味	植村邦彦	2500	2006
大月書店	4272170128	ソ連国家資本主義論——マルクス理論とソ連の経験	バレッシュ・チャトパディヤイ(大谷禎之介他訳)	3800	1999
社会評論社	4784514953	周縁のマルクス——ナショナルリズム、エスニシティおよび非西洋社会について	ケヴィン・B・アンダーソン(平子友長監訳)	4200	2015
東京大学出版会	4130065252	増補新装版 農学思想——マルクスとリービヒ	椎名重明	3600	2014
桜井書店	4905261179	資本主義と女性労働	中川スミ著、青柳和身・森岡孝二編	2500	2014

関連図書

藤原書店	4894345898	マルクスの亡霊たち——負債状況＝国家、喪の作業、新しいインターナショナル	ジャック・デリダ(増田一夫訳)	4800	2007
筑摩書房	4480790439	ミシェル・フーコー講義集成 3 処罰社会 コレージュ・ド・フランス講義 1972-1973年度	ミシェル・フーコー(八幡恵一訳)	6000	2017
以文社	4753103348	負債論——貨幣と暴力の5000年	デヴィッド・グレーバー(酒井隆史監訳)	6000	2016
平凡社	4582857849	カール・ポランニーの経済学入門——ポスト新自由主義時代の思想	若森みどり	880	2015
みすず書房	4622079262	時間かせぎの資本主義——いつまで危機を先送りできるか	ヴォルフガング・シュトレック(鈴木直訳)	4200	2016
河出書房新社	4309248318	資本主義はどう終わるのか	ヴォルフガング・シュトレック(村澤真保呂・信友建志訳)	4200	2017
作品社	4861826672	資本主義の終焉——資本の17の矛盾とグローバル経済の未来	デヴィッド・ハーヴェイ(大屋定晴・中村好孝・新井田智幸・色摩泰匡訳)	2800	2017
集英社	4087207323	資本主義の終焉と歴史の危機	水野和夫	740	2014
岩波書店	(上) 4000229562 (下) 4000229579	これがすべてを変える——資本主義 vs. 気候変動(上)(下)	ナオミ・クライン(幾島幸子・荒井雅子訳)	2700	2017

八戸ブックセンターの歩みとこれから

音喜多 信嗣（八戸ブックセンター 所長）

1 開設の背景

全国各地で、住みやすい「まち」にするため、様々な「まちづくり」が行われています。「まちづくり」には、住民や企業が主体となって行っているものだけでなく、行政が主体のもの、官民連携により行っているものなど、いろいろな形態があります。

「まちづくり」のきっかけとするものも多種多様ですが、青森県八戸市では、「本」をきっかけとした「まちづくり」を行っています。

八戸市は、人口約23万人、商圏人口約63万人の県南東部に位置する中核市です。

1964年の新産業都市指定以来、工業と水産業を中心に発展してきましたが、「生活の糧」のための施策が安定しつつあるなかで、市民一人ひとりの生きる力・考える力を養い、心が豊かになる「心の糧」のための施策、文化振興への取り組みにも力を入れています。

当市では、2014年9月に第6次八戸市総合計画を策定していますが、そのなかの重点的

に取り組むべき5つの戦略の1つとして「人づくり戦略」があり、地域社会で活躍する人材の育成を目標に掲げています。

その人材育成のための教育プロジェクトの一環として、市民が様々な本に親しむことで、豊かな想像力や思考力を育み、本のある暮らしが当たり前となる文化の薫り高いまちとなることを目指す施策「本のまち八戸」を推進しています。

2 「本のまち八戸」の取り組み

2014年度から進めている「本のまち八戸」構想では、人間の成長段階に応じた、本を切り口とした事業に取り組んできました。

最初の段階としては、赤ちゃんとその保護者を対象とした「ブックスタート事業」の実施です。生後90日頃の検診の際に、絵本の読み聞かせをするともに、絵本などをプレゼントします。赤ちゃんと保護者が絵本を通じて、ゆっくりと心ふれあうひとときをもつきっかけをつくることを応援する事業で、読み聞かせは市内の読み聞かせボランティアの方々の協力も得て行っています。まだ1歳にも満たない赤ちゃんではありますが、読み聞かせをすることにより、にこやかな表情になるなど、興味を示してくれる子が多く、保護者からは大変好評を得ています。

次の段階としては、市内の小学生を対象に、市内書店で使える2000円分のブッククーポンを配布する「マイブック推進事業」の実施です。児童が保護者と一緒に書店へ出かけ、絵本・小説・物語といった読書活動に適した本を自ら選び購入する体験を通して、読書に親しむ環境を

つくることを目的に実施しています。

開始して4年目を迎えています。保護者や児童からは、「本に触れるきっかけが増えた」、「親子のコミュニケーションが広がった」といった意見をいただくなど好評であり、2016年度からは、満3歳児をもつ保護者向けに、読み聞かせ絵本を購入するためのブッククーポンを配布する「読み聞かせキッズブック事業」も始めています。

3 八戸ブックセンターの開設

2014年度から、子どもを対象とした事業を中心に実施してきましたが、2016年12月に、主に中高生から大人を対象とした、「本のまち八戸」の拠点施設として位置づけている「八戸ブックセンター」を開設しました。

図書館で本を借りて読むという体験と、書店で本を買って読むという体験は別のもので、本を「私有」する体験が重要であると考え、当センターで取り扱う本、約8000冊は、展示用の本を除き、全て販売しています。

地方の書店の多くでは、経営面や流通面から、売れ筋となる、最新号の雑誌やコミックなどが品揃えの主力となっており、結果、海外文学や人文・社会科学、自然科学、芸術などの分野の本の陳列が相対的に少なくなっています。

当センターでは、このような、市内の書店でこれまで手に触れる機会が少なかった本に出会える場所として、また、図書館のような、目的の本が探しやすい並べ方をするのではなく、本との

偶然の出会いを誘発する提案型・編集型の陳列を行っています。八戸に「本好き」を増やし、八戸を「本のまち」にするための、「本のある暮らしの拠点」という新しいコンセプトに基づき、①本を「読む人」を増やす、②本を「書く人」を増やす、③本で「まち」を盛り上げるという3つの基本方針を定め、それに則った施策を実行していくこととしており、書店ゼロ地域である離島などを除くと、公共施設では、これまでに類のない施設として、新しい「本のある場所」となることを目指しています。

4 八戸ブックセンターの施設概要

当センターは、本の販売以外にも、本に触れるきっかけとなるような施設を有しています。

①読書席

塔のような高い本棚に囲まれた場所（本の塔）、ハンモックが吊るされた場所、当市出身の芥川賞作家である三浦哲郎氏の文机がある場所など、様々な読書席を設けており、センター内で販売しているドリンクとともに、のんびりと本に親しむことができます。

②読書会ルーム

本から得た知識や情報、感情などを共有できる場である読書会用の部屋で、ブックセンターで企画した会はもちろん、一般の方が企画した読書会のほか、トークイベントなども行っています。

③カンヅメブース

「書く人」を増やすことを目的に、本を執筆したい人向けに、集中できるブースです。



読書会ルーム 周りには本棚で囲まれている。

④ ギャラリー

特定の作家や作品に関する展示、本の印刷・造本・装丁など、本にまつわる様々な展示やトークイベントなどを行うスペースです。

5 企画事業

当センターは本の販売だけでなく、本に関する様々な企画事業を実施することで市民の方などに、本に興味をもってもらうことも大きな役割としています。

これまで実施してきた企画事業としては、

- ・ 様々なテーマ、テーマ本を決めての「読書会」
- ・ 大学などの先生を講師に招いてのトークイベント「アカデミックトーク」
- ・ 本にまつわる様々な「ギャラリー展示」や「ギャラリートーク」
- ・ 「書く人」を増やす取り組みとして、出版などに向けた「執筆・出版ワークショップ」

などがあり、その他にも、「本のまち八戸」として、図書館のほか、子育てや学校などの市の関係部署と連携した取り組みも実施しています。

6 おわりに

八戸ブックセンターがオープンし、市民の本に対する関心の高さからか、開館から10ヶ月間で15万人を超える方に来館いただきました。来館者からは、今までにない品揃えであり、陳列も工夫されていて、新たな本との出会いの場ができてよかった等の感想をいただいています。

館内で本を閲覧している方はもちろん、企画事業への参加者、「カンヅメブース」を使用するために必要な「市民作家登録」をする方も多く訪れており、順調な出足となっています。

今後も、八戸ブックセンターを拠点に、市民がもっと本に親しめるような環境づくりを行い、市民の知的好奇心を刺激するような事業を企画していきたいと考えています。八戸ブックセンターは、「読む」、「書く」など本の魅力がもっと市民の身近になることを、また、本に関わる市民活動とともに、まちの賑わいを図っていくことを第一の目標としています。本が好きになる人が増えることで、図書館利用促進や民間書店の活力増・相互連携にもつながっていき、八戸市を市民が誇りに思える、文化の薫り高いまちづくりを推進していきたいと考えています。

音喜多 信嗣（おときた のぶつぐ）

書評欄のつくり方

先日、人文書の出版社でつくる人文会の方々が当社にやってきました。一人が言うには、「単刀直入にお尋ねしますと、どうやれば、弊社の本が新聞の書評で取り上げてもらえますか？」。

私は答えた。

「それは、アレですなあ」

「と申しますと？」

「最後はアレがものを言う……」

「えっ？」

「当方は民間企業ですから、アレは罪にはなりませんし

……」

「おお、やはりアレですな」

「はっはっは。よくわかりじゃ、おぬしもワルよう、

越後屋」

などというやりとりは、もちろんまったくなかったが、実際問題、書評欄の担当者に袖の下を渡して掲載を懇願するより、同じ費用で新聞広告を出すほうが簡単だろう。新聞社としても、本の中身を問わずに紹介しては、読者が離れてしまう。

どうやったら書評欄に自社の本が載るのか？ 新聞の書評欄の歴史やそのつくり方を紹介しながら、出版社の方々の疑問に答えてみよう。



そもそも書評欄はいつからあるのか。当紙のバックナンバーを繰ってみると、戦前の紙面には、「書評」「読

野中 彰久（西日本新聞文化部）



写真1 1950(昭和25)年12月24日付の西日本新聞朝刊(第二面)。書評欄右下に「読書相談」のカットが見える。

評執筆者が大学教授や高名な評論家だからかもしれない。それではまずいと担当者は思ったのか、間もなく「読書相談コーナー」が設けられた。「安心して子供に与えられるような児童書を推薦して下さい」といった相談が寄せられている。本のコンシエルジュとは今の感覚でも斬新である。

この時期に書評欄がスタートしたことには、新聞用紙の供給の問題が関係している。敗戦後、連合国軍総司令部(GHQ)は、物資不足への対処に加えて言論をコントロールするために新聞用紙の供給を制限した。当紙は朝刊のみ2ページでの発行を余儀なくされた。統制は次第に緩和され、紙の生産も回復したためページ数が増え、1949年の終わりに夕刊も復活した。記事量が増えるとともに、随筆や人生相談など読み物の欄が設けられた。書評欄もこうした紙面充実の流れの中で、当紙に登場した。月1、2回の掲載だった。おそらく他紙も似たような状況だろう。

当紙の書評欄は、1957年から週1回の掲載になっ

「書」という欄は見当たらない。時折、「出版だより」欄に、新刊の短い案内記事が掲載される程度だったようだ。「書評」というタイトルカットが当紙に初登場したのは、1950(昭和25)年8月5日。1ページの3分の1ほどのスペースに、5冊の書評と、荒正人の評論「翻訳小説は日本文学でもある」を掲載している。書評は『原敬日記』『科学文化史年表』など専門的な本ばかり。書

た。1ページの半分ほどのスペースだった。1967年には1ページ全部を使う書評面が誕生した。1984年には、それまでの月曜から日曜へと掲載曜日が移り、2ページに増えて、現在に至っている。

書評欄の拡大にはいくつかの要因がある。一つは競争ライバル紙には内容でもボリュームでも負けてはならない。1984年の2ページ化と日曜移行も、他紙の日曜版拡充への対抗策だったらしい。もう一つは総ページ数の変化。敗戦からしばらくは2ページしかなかったのが、現在は30〜40ページになっている。総ページ数が増えれば、それぞれの欄を大きくすることができると。

新聞社が新聞の総ページ数を増やすのは、より多くの記事を書けるという商品力強化のためだけでなく、より多くの広告を収容する目的もある。電通のまとめによると、新聞広告費は、ネット隆盛のあおりを受けて、2012年から減り続けている。新聞は薄くなる傾向にあり、近い将来、そのしわ寄せが書評欄に押し寄せるかもしれない。



次に、書評欄はどのようにつくられているのかについて説明しよう。

だいたいの新聞の書評欄は、書評、インタビュ、絵もの、コラム、新刊案内、その他——という構成をとっている。この中でメインは、識者による書評だろう。書評に載せる本の選び方は、大きく分けて①朝日・読売式、②毎日式、③その他——の3通りある。

①の朝日・読売式は、有識者20人ほどに書評委員を委嘱し、だれがどの本の書評を書くかは、定期的に開く委員会で決定する。委員会の様子は、読売新聞の書評委員を10年間務めた小泉今日子さんの著書から垣間見ることができる。それによると、会議室に200〜300冊の本が並べられ、書評委員が自分で書評したい本を選ぶ。それを他の書評委員に回し、全員が手に取って見た後、1冊ずつ議論し、取り上げるかどうかを決める。

〈私は小説を取り上げることが多かったので、「ちょっと面白そうなので持って帰って読みます」とか言って。他の委員の方々は（中略）、ある方の「この本はこうだと思う」という意見に対して、他の方が「あ、でもその本に書かれてることは、ちょっとまだ疑わしいと思

う」っていうふうに、別の意見が出てきたりして」(『小泉今日子書評集』中央公論新社、2015年)

委員会が終わった後は、文壇バーのような場所で2次会もあるらしい。小泉さんと同時期の委員の1人は、「キョンキョンとお酒が飲めるから」と、多忙で時々しか顔を出さない小泉さんを目当てに、足繁く委員会に通ったそうだ。その話を聞いて私は激しく嫉妬してしまったが、小泉さんは委員会の人寄せパンダではなく、自分の言葉で本の魅力を表現できる優れた書評家であることは強調しておきたい。

次に②毎日式は、書評委員に相当する書評執筆者を決めている点では①朝日・読売式と同じだが、会合はない。その代わり、情報誌「竹橋通信」を学芸部が発行している。新刊書の中から100冊程度を選んであり、執筆者はそれを吟味し、書評したい本を決める。1992年に作家の丸谷才一さんが書評欄の「編集長」を任せられたときに始まったやり方という。「竹橋通信」には新刊が厳選されているため、新刊をチェックするのに重宝だからと、ひそかに回し読みされているといううわさを聞いたことがある。

そして③その他は、書評で取り上げる本を、文化部や学芸部などの担当部署が選ぶ。書評委員を置いている社もあれば、そうでない社もある。

当社も③その他に入る。書評委員制度はないが、それに準じる十数人の識者の方に主に書評を依頼している。適任者がいなければ、それ以外の方を探して書評執筆を頼む。

地方紙のほとんどは共同通信に加盟しており、共同通信が配信する書評と、自社で独自に依頼した書評を組み合わせて書評欄をつくっているところが多い。しかし、当紙は共同通信の書評を使用していない。地方の新聞だが、九州7県を発行エリアとする「ブロック紙」なので、福岡以外の各県ごとに発行されている「県紙」と同じ書評になってしまっている。その代わり、友好関係にあるブロック紙の中日新聞・東京新聞、北海道新聞と書評欄の記事を交換している。自社発注の書評に、友好紙の書評を組み合わせて書評欄を構成している。

書評欄の編集では、おもしろい本を選び的確に紹介することが最も大事だが、それに加え、バランスも重視する。ジャンルを偏らせない、翻訳ものを入れる、出版社



写真2 現在の西日本新聞。毎週日曜日に書評欄「読書館」を設けている。

が重複しない——などに留意している。当紙は高級紙でも専門紙・誌でもないので、専門的すぎる本はほとんど取り上げない。自己啓発やハウツー本も非常に少ない。

①朝日・読売式、②毎日式、③その他には、一長一短があり、どれが良いのかは一概には言いにくい。

たとえば①朝日・読売式や②毎日式の場合、書評委員は各分野の専門家であるがゆえ、自分の得意分野の本を選ぶ傾向がある。その結果、書評欄には「研究者以外、だれが読むんだ？」というマニアックな本がしばしば登場することになる。記者が執筆するインタビューや新刊案内などでバランスを取っているようである。また、委員会に参加する必要がある①朝日・読売式は、書評委員のほとんどが東京圏の在住者となる。すると、朝日新聞の書評委員だった森まゆみさんが言うように、へ東京にいてモノを書く生活をしていると、どうしても本を出す人間とかかわりやつきあいが出てしまふ(書評サイト「ALL REVIEWS」)ので、(知り合いの本を書評するのはじつにむずかしい)(同)という悩みが生まれてくる。

一方、③その他の大きな弱点は、本を選ぶ際に専門家

の意見がないことだろう。私の場合は、自社発注の書評の半分ほどは書評委員に準じる識者の方たちと相談しながら本を選ぶようにして、弱点をカバーするように心がけている。



当社の文化部には、各出版社から自社の本を紹介してほしいと毎日のように献本が届く。多い日は50冊を超える。

献本には、本の内容や読みどころを書いたリリースが挟まれていることが多い。私たちはこれをまず読む。当紙は九州の新聞なので、九州に関係した内容だとアピールしてあると、取り上げる可能性は大きくなる。

ある小説のリリースには、物語の中でカプトガニが重要な役割を果たしていて、カプトガニは九州にもいるのでぜひ御紙で紹介してほしい、とあった。確かにカプト

ガニは九州北部に生息しているが、小説自体と九州とはまったく関係ない。九州との強引な結びつけ方に苦笑するしかなかったが、それでも気になり、紹介記事を書いた。

地元のある出版社は、新刊ができあがると、編集者自らが本を届けに来る。必ず紹介できるわけではないが、その熱意に心を動かされることは少なくない。

当紙が日曜日の書評欄で紹介できる本は、せいぜい20冊。他の面で取り上げる本を入れても1週間で30冊程度にとどまる。どうすればその中に自社の出版物を入れることができるかという出版社の方々の問いには、「情熱」と答えた。著者に編集者、装幀家に営業担当者……、彼らが本に込めた情熱を読者へ伝える。それが私たち書評欄担当者の役割だろう。

野中 彰久（のなか あきひさ）

考えるとはどういうことか——加藤尚武著作集刊行の意義

西谷 能英（未来社 代表取締役社長）

いよいよこの十一月から加藤尚武著作集が刊行開始されることになった。以下ではこのシリーズについて紹介したい。

哲学者の加藤尚武さんと小社のおつきあいは先輩編集者であった故・小箕俊介^{おみ}から始まっている。小箕の手によって加藤さんの最初の単行本『ヘーゲル哲学の形成と原理——理念的なものと経験的なものの交差』が一九八〇年に刊行され、その年の山崎賞（正式には哲学奨励山崎賞）を受賞している。さらに一九八六年にはその後の生命倫理学の発展の基礎をつくった『バイオエシックスとは何か』が刊行され、話題を呼んだ。加藤さんが小箕をいかに信頼していたかはそれぞれの本の「あとがき」を読めば、よくわかる。

その小箕が一九八九年に交通事故で死去したあとをうけてわたしが担当することになったヘーゲル関係論文集が一九九二年刊行の『哲学の使命——ヘーゲル哲学の精神と世界』であり、これもその年の和辻哲郎文化賞（学術書部門）を受賞した。（ちなみにこの書名はわたしが提案したものであり、内容にびったりだったといまでも思っている。）その年は一般書部門でも小社刊の土居良三著『咸臨丸海を渡る』が同時受賞して二部門を独占した。受賞当日は姫路文学館でおこなわれた授賞式に意気揚々と出席し、選考委員長の坂部恵先生とも親しくお話をさせていただいたことを覚えている。

加藤さんとは、たまたまお住まいが小社の裏のマンションだったこともあって、しょっちゅうお会いするこ



加藤尚武さん

とになった。まだ千葉大学に勤務されていたところで、日本語OCRの文字読み取りの現状をわざわざ千葉の研究室まで見せてもらいに行ったことがあった。ヘーゲルのブルーカンパ版全集の日本語版テキストデータベースを作成中で、お宅でコンピュータを二台使っているところを見せてもらったこともある。まだWindows3.1だったころの話。片一方のパソコンでこのデータベースを使っ
て検索しながら、もう一台で原稿を書くというような作業をされているのを見せてもらって、学者とはこんなことまでできるのかと驚嘆したものである。この結果が、そのころ「現代思想」で連載されていた『ヘーゲルの「法」哲学』（青土社）の原型だが、『哲学の使命』にすぐつづいて刊行され、あっという間に八千部ぐらい売れて、先行した『哲学の使命』が追いつかれてしまい、ずいぶんと悔しい思いをしたものである。

また加藤さんはわたしがかうすこし若いときに親しくさせていた長谷川宏さんとも東大全共闘時代の闘争仲間でありライバルでもあって、この東大哲学科史上トップ2と言われるふたりの関係はおもしろいが、おもしろすぎてここでは触れられない。

まあ、こんな思ひ出話をしていたらキリがないのでやめておくが、この加藤尚武さんの著作集を刊行したいという構想はかなりまえから抱いていた。それが具体化されるいきさつは「季刊 未来」二〇一七年夏号の「出版文化再生」コラムで「加藤尚武著作集いよいよ刊行へ」として書いたのでくりかえさないが、よくもまあ加藤尚武さんぐらいの大哲学者の著作集が小社から出せることになったものだと思う。（なお、このコラム発表時点での著作集の構成は大幅に変わっているので、文末にその概要を掲載しておく。）



いまさらわたしが紹介するまでもなく、加藤尚武さんはヘーゲル学者として出発し、日本のヘーゲル学を世界的水準に押し上げたひとである。「内容見本」で野家啓一さんが書いているとおり、「もし加藤氏が登場しなかったならば、日本のヘーゲル研究は十年一日のごとき訓詁注釈の唄をうたい続けていたことであろう」とあるように、日本ヘーゲル学会会長として獅子奮迅の活躍でリーダーシップを発揮するばかりか、日本哲学会委員長

（会長）という要職もこなし、日本の哲学を中心になって引っ張ってこられたのである。

ところが、その加藤さんが一九八〇年代半ばごろからヘーゲル研究と並行して生命倫理学、環境倫理学の日本におけるパイオニア的存在としてまったく新しい境地を切り開かれはじめた。まわりのヘーゲル学者たちが「加藤先生ご乱心か」と騒ぎたてたというのは無理もない。そのころはまだ生命倫理学（バイオエシックス）などという学問分野が存在するとはすくなくとも日本の哲学界では知られていなかったからで、ヘーゲルやドイツ観念論だけをやっていようなコチコチの研究者からすれば、とんでもない脱線と映ったからであろう。野家さんが「十年一日のごとき訓詁注釈の唄」と書いているのはそのことである。

小社から刊行された前述の『バイオエシックスとは何か』がその意味で医学界やその関連領域のひとたちに強烈なインパクトを与えたことは紛れもない事実で、やはり「内容見本」で大井玄さんが書いてくれたように、その後の環境倫理学をふくめて広い意味での「応用倫理学」の発展に向けて、さまざまな社会領域の問題にたい

して「応用倫理哲学の旗手として、いまなお了解可能な道を示してくれている」のである。

加藤さんがその後、新書などで生命倫理学、環境倫理学、応用倫理学の部門の啓蒙書を数多く刊行し、しまいには新設の鳥取環境大学初代学長を四年も勤められたのは、そうした哲学の拡張としての倫理学（応用倫理学）の実践をみずからに「応用」されたからである。その方面での加藤さんの学問的実践的貢献は計り知れない。

そんな加藤尚武さんの書くものがどれほどおもしろいかは、すでに読まれたことのあるひとにはいまさら説明を要しないが、ヘーゲル学者、倫理学というむずかしそうな名辞のために一般的には広く読まれ、十分に理解されているわけではない。加藤さんもいつも言うように、その仕事をトータルに読んでくれているひとが少なからしい。ヘーゲル学者は応用倫理学関係はちゃんと読まないし、応用倫理学関係の読者は（こちらのほうがはるかに多いが）ヘーゲル関係は敬遠してしまう。大井玄さんのように医学界のひとでヘーゲルを読むひとは稀だが、加藤さんの『ヘーゲルの「法」哲学』を読んで、「これがヘーゲルかと思うほど平易で魅力的な語り口」だと理解

されたことを書かれている。わたしもこの本に刺戟されてヘーゲルの『法の哲学』をいますこしずつ読んでいるところだが、残念ながら加藤さんの解説のようにすんなりとわかるわけではない。ヘーゲル学者の多くが、この本は何を書いているのかさっぱりわからないと言っているぐらいだから、わたしがついていけないのもあたりまえなのだが、そんなヘーゲルの本を加藤さんはわかりやすくかみ砕いてくれる。

「彼の言葉は、哲学体系について、ヘーゲルが何を望んだかを示しているが、彼がその体系の記述で達成したことを示してはいない。ヘーゲルは体系の夢想家であって、体系の可能性の思索者でも、体系を基礎づける者でもなかった。」（『哲学原理の転換——白紙論から自然的アプリオリ論へ』本著作集第4巻所収）

なんだ、そうだったのか。ヘーゲルがむずかしいというのは、翻訳の技術の問題もあるが、そういうふうに思い込まれているからでもある。

「ヘーゲルは書くということに一度も情熱を感じたこと

のない人間である。話の糸口となるメモがあれば、とめどもなくしゃべる。ときどき泥臭いジョークを交えて、得意げにしゃべる。それがヘーゲルの自己表現であり、……」（本著作集第1巻の単行本末収録論文「ヘーゲル」より）と加藤さんはヘーゲルを冗談まじりに突き放してみている。こういうふうにあつちからの研究対象を相対化してみせることがヘーゲルをどれだけ人間的におもしろくさせてくれるか。こんなことを書いてしまえる加藤尚武はヘーゲルよりもおもしろいのではないかとわたしなどは心底思っている。そんな話を先日、書物復権の会の新企画説明会で話したら、ある取次の女性があとで「わたしもヘーゲルを読もうかしら」と言っていたのがおかしいが、おそらく読んではいないだろう。

加藤さんの文章は「人文会ニュース」に何度か掲載されている。その最初はわたしに依頼したものでタイトルは忘れたが、同じような内容の文章が著作集に収録予定である。その殺し文句を紹介しておこう。

「哲学という領域はない。哲学という次元がある。しかし、それは日常的な経験の次元と最高の学問の次

元との媒介という営み以外に自分独自の次元をもつわけではない。」「切りのないことがらに切りをつけること、無限の問題に有限の表現をあたえること、それが哲学である。それができないと、人にはどれだけの知識が必要かという問いに哲学が答えられなくなる。／哲学とは無限を有限化する努力である。」「（哲学はいま、人間に何を与えるのか、『進歩の思想・成熟の思想

——21世紀前夜の哲学とは——本著作集第12巻所収）

こういうふうになににでもわかりやすく、しかも切のいい文章で哲学を語れるひとがどれだけいるだろうか。加藤さんの文章を読むと自分の頭がすこしは良くなったなと思わせてもらえる。そんな加藤さんは哲学を過剰に興味づけることをしない。しかし「哲学という次元」から、その博識と明晰な思考力を元手に、いま現在の時代状況の与えられた条件のなかでものごとをどれだけ根本的に考えることができるかを示そうとする。なにもものを考えようとする無批判的で従順なだけの人間が「必要」とされるこの反動的な時代にあつて、筋道を立てて考えることの重要さと必要をこれほどみごとに例証して

くれるひとはいないだろう。哲学という聖域に閉じこめることなく、社会にむけてみずからの批判的思考を休みなく発信していくのが加藤さんというひとである。ものごとを深く考えるとはどういうことを豊かな手本として見せてくれる著作集となるだろう。

最後にもうひとつ、加藤さんが哲学の使命と考えられていることを要約した一文を引いておこう。

《学問と学問のあいだの接点に入り込んで問題点を探し出す仕事を、昔は、大哲学者がすべての学問を

すっぽりと包み込む体系を用意してそのなかですませてきたが、現代では、「すべての学問をすっぽりと包み込む体系」を作らずに、それぞれの学問の前提や歴史的な発展段階の違いや学者集団の特徴などを考え、人間の社会生活にとって重要な問題について国民的な合意形成が理性的に行なわれる条件を追求しなければならない。それが現代における哲学の使命である。》『災害論——安全性工学への疑問』本著作集第10巻所収

◆加藤尚武著作集概要(全15巻、A 5判9ボ1段組み、上製カバー、
各巻平均450ページ、予価5800円～6800円)

第1巻 ヘーゲル哲学のなりたち 『ヘーゲル哲学の形成と原理——理念的なものと経験的なものの交差』ほか、単行本未収録論文4篇。
第2巻 ヘーゲルの思考法 『哲学の使命——ヘーゲル哲学の精神と世界』ほか、単行本未収録論文7篇。
第3巻 ヘーゲルの社会哲学 『ヘーゲルの「法」哲学』『哲学の使命——ヘーゲル哲学の精神と世界』2章分、ほか単行本未収録論文7篇。
第4巻 よみがえるヘーゲル哲学 『哲学原理の転換——白紙論から自然的アプリアリ論へ』ほか、単行本未収録論文10篇。
第5巻 ヘーゲル哲学の隠れた位相 単行本未収録論文29篇。
第6巻 倫理学の基礎 『現代倫理学入門』『倫理学で歴史を読む——21世紀が人類に問いかけるもの』ほか、単行本未収録論文11篇。
第7巻 環境倫理学 『環境倫理学のすすめ』『新・環境倫理学のすすめ』ほか、単行本未収録論文15篇。
第8巻 世代間倫理 『子育ての倫理学——少年犯罪の深層から考える』『教育の倫理学』ほか、単行本未収録論文7篇。
第9巻 生命倫理学 『バイオエシックスとは何か』『二十一世紀のエチカ』『脳死・クローン・遺伝子治療——バイオエシックスの練習問題』ほか、単行本未収録論文4篇。
第10巻 技術論 『技術と人間の倫理』『価値観と科学／技術』『災害論——安全性工学への疑問』
第11巻 経済行動の倫理学 『資源クライシス——だれがその持続可能性を維持するのか?』ほか、単行本未収録論文19篇。
第12巻 哲学史 『20世紀の思想——マルクスからデリダへ』『進歩の思想・成熟の思想——21世紀前夜の哲学とは』ほか、単行本未収録論文11篇。
第13巻 形と美 『形の哲学——見ることのテマトロジー』ほか、単行本未収録論文22篇。
第14巻 平和論 『世紀末の思想——豊かさを求める正当性とは何か』『戦争倫理学』ほか、単行本未収録論文10篇。
第15巻 応用倫理学 『応用倫理学のすすめ』『合意形成とルールの倫理学 応用倫理学のすすめ3』『合意形成の倫理学』

2017年研修旅行報告

札幌・八戸・仙台

広報委員会 吉岡 聡(春秋社)

● 期日 2017年10月18日(水)～20日(金)

● 訪問先

【札幌】北海道立文学館・コーチャンフォーミュンヘン

大橋店・MARUZEN&ジュンク堂書店札幌店・

紀伊國屋書店札幌本店・紀伊國屋書店北海道営業部・

北海道大学生協書籍部クラーク店・三省堂書店札幌

店・札幌弘栄堂書店パセオ西店

【八戸】八戸ブックセンター

【仙台】丸善仙台アエル店・ジュンク堂書店仙台TR

店・東北大学生協文系書籍店

49回目となった人文会秋季研修旅行は、さまざまな候

補地が挙がる中、最終的に札幌・八戸・仙台地区の訪問に決定。初日の北海道立文学館での研修会・見学から始まり、翌日午前中まで札幌市内の書店・大学生協を訪問。最終日は八戸ブックセンターを視察、その後、仙台に移動し、市内の書店を巡見する行程となった。秋季研修旅行としては、札幌が2003年以来、仙台が2012年以来、八戸が初めての訪問となる。

参加者は会員社19名に加え、販売会社(大阪屋栗田・トーハン・日販)3名に同行いただき、総勢22名となった。以下、この3日間の研修旅行について報告する。

10月18日(水)

羽田空港第2ターミナル時計台1番、7時15分、例年より早い集合時間ながら、全員揃い、全日空53便に搭乗。コートを持ってきたかが話題になる中、1時間30分ほどで定刻通りに新千歳空港に到着。気温は6℃。今日1日お世話になる北都交通バスに乗車し、1時間ほど北上。

日差しが雲間から覗く。人口195万人を有する札幌市内に入り、最初の訪問先である北海道立文学館へ向かう前に、会員社からの著作もある、北海道札幌南高等学校在職の学校司書、成田康子先生と合流し、昼食。食事を終え、数分南下し、北海道立文学館に到着。ちなみにここから車で更に1kmほど南下すると札幌南高等学校に至る。館内の講堂をお借りして成田先生との研修会を行う。「高校図書館をつくる」と題された講演は充実の内容。大学図書館、公共図書館とはこれまでも交流の機会があったものの、高校図書館については不案内な会員社もあり有意義な時間であった。質疑応答と会場撤収で残り少なくなった時間を利用して駆け足で館内見学。常設展として「北海道の文学」、創立50周年記念特別展として『《サハリン島》2017——アントン・チェーホフの遺産』が開催されていた。

成田先生に見送られながら出発。10分ほど南下し、2004年9月開業のコーチャンフォー・ミュージン・ヘン大橋店(売場面積1200坪。以下同)を訪問。同店は郊外の大規模店舗で、シニア層・ファミリー層をターゲットに据えながらも、専門書も数多く揃える。2Fの会議室



北海道札幌南高等学校の成田康子先生

へお通しいただき、担当の斎藤鉄哉マネージャーと新川通り店支店長の玉村武美執行役員にお話を伺う。大橋店の人文書ジャンルにはまだ伸びしろがあるとのこと。今後に期待。訪問前の窓口となつて下さった萩生田健サブマネージャーには、ちょうど東京出張中とのことでお会いできず。その後、15分ほど北上し、札幌市中心部の大通駅周辺へ。デパートの丸井今井南館に位置する、2008年12月開業のMARUZEN&ジュンク堂書店札幌店(1780坪)を訪問。B2~4Fの全6フロア(5Fにステーションナリー)での品揃えに圧倒。3F人文書売り場で三渡修司店長、担当の武良史織さんにご挨拶。人文書の客層は多様とのこと、品揃えの充実とメンテナンスへの細やかな配慮が感じられる。同行のトーハンと小会との共同企画「人文書ベストセレクトション」フェアも開催中だった。

3軒目は、札幌駅周辺へ10分ほど移動し、2005年4月開業の紀伊國屋書店札幌本店(1300坪)へ。天井が高く、開放感のある店内にて、石堂聡店長、担当の林下沙代さん、長田雅子さんにご対応いただく。日々のニュースや新刊動向をしっかりと捉えた丁寧な棚づくり

に好感。林下さんからは『人文書販売の手引き』や『人文会ニュース』もご活用いただいていると嬉しいお話。最後は札幌市内の書店・大学生協のご担当者様、トーハン北海道支店様、日販北海道支店様をお招きしてささやかな懇親会を行い、初日を終えた。

10月19日(木)

2日目は引き続き札幌市内の書店と大学生協を徒歩で訪問し、空路を経て、本日の宿、青森市にある浅虫温泉に向かう行程となる。

本日も雲は多いが晴れ。朝食後、外に出ると吐く息は白い。8時55分、札幌駅前のホテルから数分、昨日訪問した、紀伊國屋書店札幌本店が入るビルsapporo55の3Fに位置する、紀伊國屋書店北海道営業部へ。大場裕之部長に札幌を中心とした道内の市況をご紹介いただく。札幌本店と連携した大学生向け選書ツアーの実施等、興味深いお話を伺う。次に北海道大学生協書籍部クラック店(90坪)へ移動。開店まで時間があるため少し寄り道。正門から入り、構内のクラック胸像を通り、10分ほどで北大生協会館2Fの同店へ。大矢かおり店長と

担当の片岡真さんにご挨拶。ベテランの片岡さんは会員社とも交流が深く、さすがの棚づくり。他方、後継者問題に頭を悩ませているとのこと。大学生協北海道事業連合の太田乙生さん、構内徒歩15分ほど離れた北部店の担当、高木美雪さんも駆けつけて下さった。

北大生協会館の出入り口まで片岡さんに見送っていただき、ここから三省堂書店札幌店（800坪）へ向かう。藤原哉店長、大塚俊也副店長、担当の島あゆみさんにお迎えいただく。2009年2月にJRTタワー札幌ステラプレイスEAST5Fに大丸札幌店より移転した同店は、立地上、若い女性が顧客層かと思いきや、近年中高年の男性層が増加しているとのこと。昨年8月にレイアウト変更と在庫強化を行ったそうだが、棚はコンパクトで見やすく、まだまだ売り上げは伸びるのではないかとという予感と意気込みを感じる。なお同店では、定期的に大々的な人文会フェア開催や「人文会 今月の話題の1冊コーナー」常設など会員社の書籍販売にご尽力いただいている。その後、数分の移動を経て、札幌駅構内の札幌弘栄堂書店パセオ西店（55坪）を3グループに分かれて訪問。担当の坂胤美さんにご挨拶。人文書の棚は今回



札幌研修 懇親会での集合写真

訪問する書店の中でもっとも少ないながら、改札からすぐという通勤・通学のアクセスの良さから常連のお客様も付いており、普段なかなか専門書に触れる機会がない読者へ「本との出会いの場」を提供して下さっている。石川幸店長は公休とのことでお会いできず。3店とも事前のご案内と異なった訪問時間や訪問形態にもかかわらず丁寧にご対応いただいた。

さきほど訪問した三省堂書店札幌店の藤原店長をお誘いし、昼食。食後、藤原店長とお別れし、札幌駅よりエアポート快速136号で新千歳空港へ。全日空1900便（プロペラ機）で青森空港へ向かう。道央ではだいぶ進んでいた紅葉だが、青森ではまだまだこれから45分ほどの空の旅の後、翌日の八戸駅までお世話になる北彩観光バスに乗り込み、陸奥湾に面した浅虫温泉に向かう。夜は同行いただいている販売会社お三方の慰労会を行う。

10月20日（金）

研修旅行最終日、どんよりとした曇り空。8時に宿を出発しバスで2時間ほど移動。市長政策公約により推進

中の「本のまち八戸」プロジェクト拠点施設として注目を集める八戸ブックセンター（95坪）を視察。音喜多信嗣所長ご不在のところ、森佳正さん、吉田英二さん、森花子さんにお迎えいただき読書会ルームにて施設案内と質疑応答。昨年12月に開業した同店は、雑誌・コミックを取り扱わず、書籍をいわゆる「文脈棚」で陳列し、1点の銘柄を複数冊仕入れることは基本的にしなかったり、客注は受けずに市内の別の書店を紹介したりと、館内の設備面（書見用のハンモックやドリンクホルダー）も含めて、カフェ併設型によりやく慣れてきた会員社も戸惑うような「新しい形の書店」であった。詳しくは本誌17ページからの音喜多所長による特別寄稿をご一読願う。人口23万人という地方都市、八戸で「市営書店」がどう成長していくか、今後の動向を見守りたい。なお八戸市長選を翌々日に控えており、小林眞市長には面会できなかった。4選の報を聞き、また別の機会を得られればと思う。ちょっとしたアクシデントがあったが、森佳正さんに見送られ八戸駅へと20分ほど最後のバス移動。はやぶさ18号で最後の研修地、仙台へ向かう。言わずと知れた東北最大の都市である仙台市の人口は108万人。車中



八戸ブックセンターの内観

でいそぎ昼食を取り、1時間10分ほどで仙台駅に到着。弱い雨が降り始めている。予定通り、市内の移動は全体を6班に分けての行動となる。最初の訪問先、丸善仙台アエル店（560坪）へ徒歩数分の移動。現在、営業を続けながら改装中。担当の芦萱亮さん、平間明理さんにご挨拶。いままでの什器から、背が高くストックと平積みスペースのないジュンク棚へ模様替え。比較的若い男女が人文書の顧客層で、精神世界や心理読み物などが好調とのことだが、また新たな展開方法を模索していくと前向きな姿勢。アエルビルを出て、各班は一度、仙台駅へ。

2015年12月に開通した仙台市地下鉄東西線の影響で人の流れに変化があったのか、さほど体感できぬまま、地下道でジュンク堂書店仙台TR店（560坪）を目指す。駅から雨に濡れずに移動できるのは便利ながら、「仙台に住んでいる人は、あまり地下のお店に馴染みがない」との声もある書店員から伺う。歩くこと数分で入店。今回唯一の地下にある同店で佐藤志保副店長と担当の石山文子さんにお出迎えいただく。学生から中高年男性が人文書の購入層とのことで、低めで見やすい棚と手入れが行き届いた安定感のある品揃え。お話もそこそ

に慌ただしく店内を後にし、再び駅前へ。班ごとにタクシーへ乗車し西進。東北大学生協文系書籍店（300坪）を訪問。担当の木村真実さん、植竹明美さんにご挨拶。人文書は経験で売り上げが大きく左右されるジャンルだが、お二方とも担当になってから日が浅く、版元からの積極的な提案が必要に感じる。同大の教職員・学生・院生には歴史書・哲学書が好調とのこと。台風の影響か雨脚が少し強まる中、仙台駅へ戻り、研修旅行の全行程が終了。解散式を行い、やまびこ150号で帰路につく。

訪問箇所は例年より少なく、飛行機・新幹線・バス・タクシーと交通手段を駆使し、札幌・八戸・仙台を駆け足でまわった秋季研修旅行であった。北海道では第1の都市、札幌以外の厳しい経済状況を耳にしたが、実際

目にすることができなかった。とはいえ、なかなか訪問できない会員社もある中で、3エリアの書店・大学生協の方と、店頭で棚を見ながら直接お話ができる貴重な機会となったのはもちろん、初日の成田康子先生との研修会や3日目の八戸ブックセンターの視察は収穫であり、各社がこれから営業活動を続けていく上で大きな糧となるだろう。

この3日間、お世話になった書店・大学生協・販売会社など訪問先のみなさまには心より御礼申し上げます。また、ご同行いただいた大阪屋栗田の坂野上正臣さん、トーハンの今祐介さん、日販の浅香健さん、どうもありがとうございました。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2017年12月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
御 茶 の 水 書 房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀 伊 國 屋 書 店	志田 則幸	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3122
勁 草 書 房	西野 浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	片桐 幹夫	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠 信 書 房	奥村 友彦	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創 元 社	水口 大介	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
筑 摩 書 房	藤井若菜彦	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日 本 評 論 社	五月女 公	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社(休会中)		101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	朝倉 哲哉	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	須藤 圭	101-0052	千代田区神田小川町2-4-17 大宮第一ビル6F	3296-1615	3296-1620
未 來 社	水谷 幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-5596
吉 川 弘 文 館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 田崎洋幸

会計幹事 平石 修

書記幹事 片桐幹夫

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎朝倉哲哉 ○水谷幹夫・志田則幸・奥村友彦・森 卓巳・澤畑 壘

調査・研修委員会 ◎水口大介 ○片山伸治・西野浩文・藤井若菜彦・五月女 公

広報委員会 ◎岩野忠昭 ○乙子 智・佐藤信治・吉岡 聡・須藤 圭

人文会 ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

人文会ウェブサイト、リニューアルのご案内

「人文会ニュース」のデザイン変更に伴い、ウェブサイトもデザインを一新いたしました。「人文会ニュース」との統一感を出すだけでなく、メニューなどのインターフェースも変更し、これまで以上に人文会の各種情報にアクセスしやすくしました。

人文会が主催する、あるいは協力しているイベントやフェアの情報は「フェア・イベント情報」に随時掲載いたします。四大全国紙の読書欄に掲載された会員社の出版物は「書評情報」にまとめてあります。「今月の一押し」「ベスト・セレクション」はPDFファイルをダウンロードできますので、店頭の品揃えにお役立てください。

「人文会ニュース」の各コンテンツは「人文会ニュース」からPDFファイルで閲覧が可能です。



URL <http://www.jinbunkai.com/>

『人文書販売の手引き〔第2版〕』のご紹介

『人文書販売の手引き』とは、人文会が編集・発行する書店員様向け人文書販売マニュアルです。第2版はデータを大幅に更新し、より使いやすくなっています。『人文書販売の手引き』を店頭活性化にぜひご活用ください。

(前略) かしながら昨今、状況は一変しました。中堅やベテランといえるキャリアの方から教えを請われることが多くなり、このことは当然、若手の書店員の方々にも影響してしまいます。なので、このような状況を打破するためにも、マニュアルの作成が必要であると判断しました。

「人文書販売の手引き」には、役立つヒントは載っていますが答えは載っていません。あくまで骨組みの提示であり、肉付けするのはそれぞれのご担当者です。大変恐縮ですが、試行錯誤して頂きながら、個々のお店に合った答えを導き出して頂ければ幸いです。

「人文書販売の手引き」には、役立つヒントは載っていますが答えは載っていません。あくまで骨組みの提示であり、肉付けするのはそれぞれのご担当者です。大変恐縮ですが、試行錯誤して頂きながら、個々のお店に合った答えを導き出して頂ければ幸いです。

(『人文書販売の手引き』第2版刊行に際して)より)

項目	評価項目	評価基準	評価結果	評価理由	評価者
1. 基礎知識	基礎知識の理解	基礎知識の理解が深い	5.0	基礎知識の理解が深い	評価者
2. 応用知識	応用知識の理解	応用知識の理解が深い	5.0	応用知識の理解が深い	評価者
3. 実践能力	実践能力の発揮	実践能力の発揮が深い	5.0	実践能力の発揮が深い	評価者
4. 態度・意欲	態度・意欲の発揮	態度・意欲の発揮が深い	5.0	態度・意欲の発揮が深い	評価者
5. 総合評価	総合評価	総合評価が深い	5.0	総合評価が深い	評価者



『人文書販売の手引き』第2版は、人文会ウェブサイトよりダウンロードできますので、是非ご利用、ご活用ください。

<http://www.jinbunkai.com/>

『人文書販売の手引き [第2版]』

編集・発行：人文会

B5判並製84頁 2015年10月1日発行

ISBN978-4-915735-07-3 (非売品)

目録のご案内

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

●人文図書目録刊行会発行 A5判・平均245頁 頒価本体(各)286円



◆哲学・思想図書総目録2017-2018年版

約2,200点(140社)収載。

〔掲載分野〕哲学・思想一般/倫理学・人生論/美学/各国哲学
/現代哲学/宗教一般/宗教学 ほか

ISBN 978-4-915268-37-3



◆心理図書総目録2017-2018年版

約3,200点(120社)収載。

〔掲載分野〕心理総論/基礎心理/発達心理/教育心理/臨床心
理/精神分析/精神医学/社会心理 ほか

ISBN 978-4-915268-38-0



◆社会図書総目録2017-2018年版

約2,800点(130社)収載。

〔掲載分野〕社会一般/家族社会/地域社会/産業労働/福祉教
育/社会心理/社会問題/文化文明論/文化人類学 ほか

ISBN 978-4-915268-39-7

* ご注文は書店にお願いいたします。

●人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7(みすず書房内)

●人文図書目録刊行会

〒162-8710 東京都新宿区東五軒町6-24(トーハンビル内)

TEL 03-3266-9521(事務局)

2017-2018年版

哲学・思想図書総目録

哲学・思想一般 / 倫理学・人生論 / 美学 / 各国哲学 / 現代哲学 / 宗教一般 / 主教学 ほか

心理図書総目録

心理総論 / 基礎心理 / 発達心理 / 教育心理 / 臨床心理 / 精神分析 / 社会心理 ほか

社会図書総目録

社会一般 / 家族社会 / 地域社会 / 産業労働 / 福祉教育 / 社会心理 / 社会問題 / 文化文明論 / 文化人類学 ほか

◎A5判・平均245頁 ◎頒価本体各286円

人文図書目録刊行会

〒162-8710

東京都新宿区東五軒町6-24
トーハンビル内

病院で働く心理職

次世代の心理職および公認心理師を目指す人のために

野村れいか 編著

現場から伝えたいこと

国立病院機構全国心理療法師協議会監修 ◎2200円＋税

精神科医は

仙波純一 著

くすりを出すとき

こう考える

心の病気をくすりで治すってどういうこと？
どのくらい効くのか「カウンセリング」との違いは？
——「リアルな理屈」を開陳！

◎1700円＋税



日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 <https://nippyo.co.jp>

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

《叢書・ウニベルシタス 1068》

カフカ 〈新訳〉

マイナー文学のために

G. ドウルーズ、F. ガタリ 著 / 宇野邦一 訳
書きながら、奇妙な戦いを続けたカフカ。
否定ではなく肯定、その生々しく蠕動する過程。すさまじい思考の生気が、いま新訳で蘇る！

2700円

《叢書・ウニベルシタス 1061》

反教養の理論

大学改革の錯誤

K.P. リースマン 著 / 斎藤成夫、齋藤直樹 訳
現代オーストリアを代表する哲学者による、市場重視の大学改革への徹底批判。
反教養の危機を超えて、啓蒙を担う大学の再生は可能か。

2800円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税別です

メルロー・ポンティ 哲学者事典

完結！

第一巻 東洋と哲学・哲学の創始者たち・キリスト教と哲学
第二巻 大いなる合理主義・主観性の発見
第三巻 歴史の発見・実存と弁証法・外部の哲学者たち
モリス・メルロー・ポンティ 編著 各本体5400円＋税
加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均、加國尚志 監訳
別巻 現代の哲学・年表・総索引 本体6400円＋税
加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均、加國尚志 監修

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel. 03-3291-7811 / fax. 03-3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp/>

加藤尚武著作集

第1巻

ヘーゲル哲学のなりたち

日本哲学界待望の著作集(全15巻)いよいよ刊行開始! 第1回配本は著者の仕事の原点ともいべきヘーゲル哲学研究の基本を示す最初の著書『ヘーゲル哲学の形成と原理』ほかを収録。

5800円

ホモ・コントリビューエンス

滝久雄・貢献する気持ちの研究

加藤尚武 編著

「貢献心は本能である」(滝久雄)というテーゼをめぐる国内外の人文科学、社会科学、自然科学の専門家21人が寄稿した24論考による初めての学際的研究の総合成果。

5800円



未来社

〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2

TEL03-3814-5521 FAX03-38145596

<http://www.miraisha.co.jp/> ※表示は税別

「内なる外国人」

A 病院症例記録

北山修編著 英国で精神分析に出会い診たふたりの患者の治療記録 北山理論の原点 飯島・大森解説 金坂他訳 2000円

サルは大西洋を渡った

デケイロス 「奇蹟的な」仮説こそが真実だった。生物たちの驚くべき航海が進化史を書き替える。柴田・林訳 2000円

例外時代

高度成長はいかに特殊であったのか

レヴィンソン 第二次大戦後の高度成長期が例外であり、現状の低成長が平常経済と論じた新経済史。松本裕訳 2000円

幕末的思考

野口良平 明治の到来とともに隠蔽された普遍と道理に拠る立国の思考―その画期性を歴史の行間に炙り出す。三〇〇円

みすず書房 (税別)

東京本郷2-20-7 <http://www.ms2.co.jp>

戦争とトラウマ

不可視化された日本兵の戦争神経症

中村江里著 アジア太平洋戦争期に軍部の注目を集めた戦争神経症は、なぜ戦後長らく忘却されてきたのか。4600円

日本メディア史年表

土屋礼子編 SNS・テレビ・新聞から、映画・雑誌・ラジオまで。メディアは何を伝え、人びとを動かしてきたのか? 6500円

終わらない 戦争の記憶。 「戦争は狂気です。…あの自兵戦を経験すれば、どんな人間でも鬼になってしまいます」 (兵士の言葉 本書より)

心と体を蝕む

「ネット依存」から

子どもたちをどう守るのか

樋口進 監修

独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター院長

* B5判美装カバー144頁 本体価格1800円

新しい時代の本格的な教養書シリーズ、創刊!
MINERVA Excellent Series ① 心理 NOW!

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税別/宅配可

吉川弘文館

東京都文京区本郷 7-2
TEL03-3813-9151 税別

台湾人の歌舞伎町

新宿、もうひとつの戦後史

稲葉佳子、青池憲司

〈らんぶる〉も〈スカラ座〉も
〈風林会館〉も台湾人が作った——
戦後新たに構想された興行街・
歌舞伎町に台湾人が集結した背景
に迫る。▶本体価格 1,800円＋税

無銭経済宣言

お金を使わずに生きる方法

マーク・ボイル／吉田奈緒子 訳

フリーエコノミー運動創始者による、
人類のサバイバルのためのバイブル。
『ぼくはお金を使わずに生きることにした』著者、待望の
第2作! ▶本体価格 2,000円＋税

紀伊國屋書店

出版部:東京都目黒区下目黒 3-7-10
営業TEL03(6910)0519

税別

あの日以降、私たちが経験してきた
〈状況〉を捉える視座

ポピュリズムと 「民意」の政治学

3・11以後の民主主義

木下ちがや 著 46判・2400円

20世紀最大の思想家から

21世紀への警鐘

〈政治〉の危機と アーレント

『人間の条件』と全体主義の時代

佐藤和夫 著 46判・2800円

東京文京 大月書店 電話03-
本郷2-27 3813-4651
otsukishoten.co.jp(メルマガ配信中)

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

〈第15回角川財団学芸賞受賞!〉

南方熊楠—複眼の学問構想

松居竜五 著 南方熊楠研究の第一人者
である著者による「熊楠論」。西欧の知的
潮流に正面から向き合い、独創的な知
を紡いだ学者南方熊楠の多様性と集束
力の織り成すダイナミズムを描く力作。

◎4,500円

失踪の社会学

—親密性と責任をめぐる試論

中森弘樹 著 失踪が惹起する実存的な
問いを突きつめ、あなたや私がそこに
いる、という一見自明の事態を根底から
見つめなおす、気鋭の力作。 ◎4,200円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税抜】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

御茶の水書房

◎「慰安婦」写真展中止事件から五年、自衛社会を乗り越えるために
安世鴻 李春熙 岡本有佳 編 A5判・二九四頁 本体・四〇〇円

誰が「表現の自由」を殺すのか

—コンサロン「慰安婦」写真展中止事件裁判の記録

ニッポンが抗議を恐れて中止決定に至った経緯や、ネット上の抗議行
動が「表現の自由」に与えた影響など、日本社会が直面する課題に教
訓を示す。板垣竜太、小倉利丸、金富子、李史織ほか執筆。詳細な
裁判資料を付す。

◎「性」の尊厳を踏みにじる軍事化と排他的ナショナリズムに抗して
宮城晴美 高里鈴代 安次嶺美代子 山城紀子 川田文子 秋村ミユ子
鄭映恵 大嶋果穂 山下明子 著 A5判・三〇頁 本体・三〇〇円

沖繩にみる性暴力と軍事主義

戦争責任と戦後責任を問い直す趣旨で、近代日本から現代に続く
性暴力の現実について、沖縄と軍事支配に焦点を当てて検証する。

東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684) 0751

こわいもの知らずの 病理学講義

HONZ書評でもおなじみ

大反響8刷!

仲野徹



大阪大学医学部の
人気講義が書籍化!

ボケとツッコミで学ぶ病気のしくみ。
阪大の名物教授が「近所のおっちゃん・
おばちゃん」のために書き下ろした、
本邦初の笑って読める医学書。細胞は
なぜ死ぬの? がん発生のしくみは?
病気と「ぼちぼち」付き合っていくため
の必読書! 本体価格 1850 円+税

晶文社

〒101-0051 千代田区神田神保町 1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

メタ倫理学入門

道徳のそもそものを考える

佐藤岳詩

善いとか悪いってどういうこと?
あるの? 一歩下がって考えると新しい世界が見えてくる。

倫理の問題に答えるんで

自然主義入門

知識・道徳・人間本性をめぐる現代哲学ツアー

植原亮

哲学と科学を緊密に結びつけ、科学をとおして人間の知の営
みをとらえようとする「自然主義」の初の入門書。

本体2800円+税

現代形而上学入門

柏端達也

分析哲学のアプローチによる形而上学とはどういうものか。
その奥深さと手触りを体感する新しい入門書。

本体2800円+税

はいまう

勁草書房

TEL 03-3814-6861

FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1

<http://www.keisoshobo.co.jp>

トラウマ関連疾患 心理療法ハンドブック

事例で見る多様性と共通性

U. シュニーダー・M. クロワトル 著 前田正治・大江美佐里 監訳
トラウマ治療の実際にフォーカスし、事例を通じて
エビデンスに根差した各種療法の特徴やストレ
ングス、課題を浮き上がらせた決定版。5000 円

衣笠隆幸選集1

対象関係論の理論と臨床：
クライン派の視点を中心に

衣笠隆幸 著 長年にわたる精神分析による
臨床経験と英国精神分析理論に関する該
博な知識をもとに書かれた論文集 8500 円

心理学の神話をめぐって

信じる心と見抜く心

日本心理学会 監修 邑本俊亮・池田まさみ 編
心理学を通じて「真実を見抜く目」を養う、情報が溢
れる社会で迷子にならないための指南の書。1800 円

誠信書房

東京都文京区大塚 3-20-6
TEL. 03-3946-5666 (税別)

擬

MODOKI

「世」あるいは
別様の可能性

松岡正剛

「世」はすべて
「擬」で出来ている。

編集工学者松岡正剛、本領発揮。
超ジャンル思索をベースに捉えが
たい「世」を縦横無尽に語り尽くす。
たちまち重版! 定価(本体1900円+税)

春秋社

東京都千代田区外神田2-18-6

☎03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

<http://www.shunjusha.co.jp/>

2017 年 12 月 25 日発行 年 3 回発行 第 128 号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉